

近世ロシア軍事史研究の動向

——18世紀史を中心に——

*田 中 良 英

The Recent Studies of the 18th-Century Russian Military History

TANAKA Yoshihide

Abstract

After the 1960s, in the European countries and the United States more and more researchers have paid large attention to the military history from the new perspective, so called "the new military history." Although the Soviet historians gave a few but very interesting academic products concerning the army, the research trend all the more comparable to the new military history in the West was remarkably set after the collapse of the Soviet Union. This paper intends to present several features in the recent studies of the 18th-century Russian military history mainly in Russia, along with the Western and Japanese trends. Especially for past twenty years the Russian and Western researchers have shown a lot of noticeable results on the close relation between the army and the civil society in 18th-century Russia. It has been stressed that the Early Modern European states generally included many various elements within their territorial frames. This pre-modern nature could be seen also in the military units both in the West and Russia. Therefore the studies on the Russian army and the social lives surrounding it can give us the important materials to rethink the essential problems in the Early Modern European history.

Key words : new military history, 18th century, Russia

1. はじめに

近年、日本の西洋史研究では「広義の軍事史」や「新しい軍事史」と呼ばれる分野が伸長し、すでに多くの成果が生み出されている。それゆえ、このテーマの全体的な性格については、すでに知られている部分も多いかとは思われるが、まずは同分野をリードしてきた近世ドイツ史家・阪口修平の整理にしたがい、概観しておくことにしたい。

かつての軍事史研究、いわゆる「狭義の軍事史」は、軍人かその経験者、あるいは専門教育を受けたプロの軍

事史家の領域であり、いわゆる軍事学の一部として、戦史を主要な内容としていた。それゆえ歴史学の分野ではほとんど研究の対象とはならなかったが、この傾向は、第2次世界大戦の敗北に伴い、戦前の軍国主義に対する反省の一端として、軍事史研究がタブー視された日本やドイツでは、さらに強いものになったと言える。

これに対し、欧米では1960年代以降、まさに歴史学の研究対象として軍隊を広く取り扱う、広義の軍事史研究が模索されるようになった。その影響を受け、1990年代以降ドイツや日本でも同分野の研究が盛んになり、特にドイツではブームとも言える状況があると

* 宮城教育大学社会科教育講座

される。

この広義の軍事史における研究対象について、阪口は第1に「軍隊や戦争そのもの」、第2に「軍隊とその他の歴史の領域との相互の関係」を挙げる。第1のカテゴリーは、従来の軍事史研究とも重なる部分が多いが、これまで勝敗に直接関わる戦略・戦術、軍事技術や軍隊制度が戦史の観点から明らかにされてきた一方で、戦場や平時における将兵の実生活、いわゆる日常史の側面は手つかずであった。むしろ後者の側面こそ、新しい軍事史の主要な課題となる。

第2のカテゴリーは、軍隊が他の領域に与えた影響の考察にとどまらず、軍隊が社会の側から受けた影響を明らかにすることで、歴史に対する軍隊の規定力と被規定性の両面を検討することを目指す。その際に大きなテーマとなるのが、軍隊および戦争と国家・社会・文化との関係である。中でも、軍隊と社会との相互作用は、現在の軍事史研究の中心的テーマとされる（阪口（2010, PP.1-13）¹）。

とはいえ、実際に近年の研究成果を見てみると、阪口の区分にあるような明確なカテゴリーには、必ずしも分類しきれないわけではない。むしろ、軍事史研究と他の歴史学研究との間の境界線が急速に希薄化している上に、広義の軍事史研究に属する個々の成果の中にも、複数の領域にまたがる複合的な性格を持つものが多く含まれるからである。それゆえ、広義の軍事史の範囲を明確に定義することは実は極めて困難なのだが、総じて最近の共通の理解となっているのが、軍隊や兵士が一般社会と隔絶された特殊な存在などではなく、とりわけ近世までは社会と不可分の関係を持つ点、それゆえ軍隊には当時の社会の諸特徴が反映されており、後者を知るためには軍隊が重要、場合によっては必須の分析対象と捉えられている点だろう。

ところで先にも挙げたように、軍事史研究の活発化の時期や進捗の方向性は、各国の社会や歴史学の置かれた状況によっても微妙に異なる。本稿は、近世ロシア、特に筆者が専門としてきた18世紀（ただし、いわゆるピョートル1世（1672～1725、在位1682～1725年）からパーヴェル1世（1754～1801、在位1796～1801年）

の治世までの「長い18世紀」を対象とする）を中心に、ペレストロイカ期以降の軍事史研究の動向を整理することを最大の目的とするが、それは同時に、ソ連解体を経てのロシア史学全般の変化の傾向を考察することにも通じるものと思われる。ロシア本国における研究を中心に扱うものの、欧米および日本の研究動向についても後で触れることにしたい。

なお本稿では、後述するようなロシア独自の軍事史研究の進展の流れも考慮し、阪口の区分とは異なる形で、文末に近年の成果を整理したリストを添付した。大きくは、第1に戦闘の現場に直接関係するもの、第2に軍事行政や人材養成・補給など、いわば銃後に関係するもの、第3にその他、と分類した（その際、本紀要の執筆原則とは異なり、それぞれのグループの中で、ロシア語・欧語・日本語文献の順で配列している点をお断りしておく）。基本的に第2・第3のカテゴリーが広義の軍事史研究と共通の関心に基づく傾向が強いとはいえ、第1のカテゴリーにも新たな性格が多々見られる。また、先述のように横断的な研究も多いため、あくまで中心的なテーマを尺度として便宜的に分類してみた結果にすぎない。また軍事史研究とそれ以外との区別が困難なこともあって、全てを網羅しきれているとは到底言えないが、それでも一定の傾向性を捉える助けにはなり得るものと考ええる。これらについて本稿で紹介する場合には、括弧内にリストでの番号のみを記載する形をとる。

2. 現代ロシアにおける18世紀軍事史研究

(1) ソ連期の軍事史研究

近年の動向を探る前に、まずはその比較材料としてソ連期の状況を検討しておきたい。この点を考える上で一つの手がかりとなるのが、同様のテーマを扱う2つの論集の存在である。

本稿が扱う「長い18世紀」は、ピョートル1世の全般的改革により、軍隊の構造も含め、ロシア社会が大きく変動した時代と見なされることが多い。そのピョートル治下のロシアにとって、1700～21年にスウェーデ

1 この他にも、阪口・丸島編著（2009）や三宅他編著（2011）のような論集が近年相次いで刊行されている。これら以外にも個別の論文については枚挙にいとまがないが、2000年代前半までの日本の研究成果を整理したものとして、鈴木（2005）が参考になる。また新しい軍事史研究の簡潔な動向紹介として、他に大久保（1997a, 1997b）、阪口（2001）。

ンとの間で戦われた北方戦争（北欧史の文脈では、バルト海の覇権を巡る従来の戦争とは区別する意味で、「大北方戦争」と称されることが多い）の遂行を、最大の国家的課題と見ることに異論は少ないだろう。開戦直後、兵数に勝りながら、国王カール12世（在位1697～1718年）指揮下のスウェーデン軍にナルヴァ Нарва（現エストニア領）で大敗を喫したロシアは、まさに国家存亡の危機に立たされたが、1700年代に急速な軍事改革を経て常備軍を構築し、1709年夏、ポルタヴァ Полтава の会戦に勝利して、逆にスウェーデン軍に壊滅的な打撃を与えることで、戦局を大きく変えたとされる。この会戦は、それまで諸国の駐在使節からも折に触れて無力を冷笑されていたロシア軍が、当時無敵を誇ったスウェーデン軍を破る直接的なインパクト（それゆえに『ヨーロッパを震撼させた戦闘』と称するモノグラフ（28）もある）と共に、18世紀中葉にかけてロシアが急速にヨーロッパの大国へと成長する契機となった点でも、ロシア史における最大の事件の一つとして記憶され続けてきた。

それゆえ、会戦300周年に当たった2009年には、中央政府主催の記念式典が挙行されるのみならず、関連文献の刊行が相次いだ。その中には、論文集『ポルタヴァ——ポルタヴァ会戦300周年——』も含まれる（20）。ちなみに、ポルタヴァは現在ウクライナ領に位置するが、2009年当時ユーシェンコ政権とロシア政府との関係が冷却化していたこともあり、ウクライナ政府による式典協賛の態度は微弱で、むしろ同国のカザーク（コサック）軍がロシア軍を破った1659年のコノトブ Конотоп の会戦の記念式典を取って挙行するほどだった。歴史的過去が現代政治に利用されたケースとして注目される。

ロシアでは日本に比べ記念年に対する感覚が鋭く、1999年には、現在のロシア連邦外務省の母体となる外務参議会の設立275周年（1）を記念して、モスクワ国立国際関係大学（МГИМО）で外交史のシンポジウムが行われたりもしている。その点からすれば、1959年にポルタヴァ会戦250周年を記念した論文集 Полтава

（1959）が刊行されたことも、むしろ自然な流れと言えよう²。この論集は大きくは「ポルタヴァの勝利とその歴史的意義」「ロシア軍と18世紀初頭の諸変革」「ポルタヴァの勝利に関わる史料と記念碑」の3章に分けられ、論文23本が収められている。

この章題にも示唆されるように、この論文集には必ずしも狭義の軍事史研究に属する内容ばかりが含まれていたわけではない。むしろ、そのような戦史に近い研究はごく少数である。他方で2009年刊の論文集では、章題は「ポルタヴァの勝利の軍事的・外交的側面」、そして「社会の文化と宗教におけるポルタヴァ会戦」となっており、後にも改めて触れるように、特に後半は新しい軍事史研究の方向性と共通する性格が強まっていると言える。

こうした近年における一定の変化も見られるものの、逆に、半世紀前の論文集が必ずしも戦史に特化した分析に留まらない点は注目に値する。この10年後、1969年に刊行された『ロシア軍事史の諸問題：18世紀および19世紀前半』（Вопросы, 1969）でも、「史学史」「軍事思想」「軍備の製造と軍の補給」「軍の編成と準備」「戦士の歴史より」「階級闘争と軍」「軍事史に関する新史料」といった章題や、収録論文の全体的性格は、確かに1773～75年のプガチョーフ叛乱を「農民戦争」と規定するような階級闘争史観の存在など、マルクス主義史学の色濃い影響も一部見られるとはいえ、総じて広義の軍事史研究と重なる部分が多い。

この理由として考えられるのは、これらの論集に参加しているのが、Я.Е. ヴォダルスキー Водарский、Б.Б. カフェンガウス Кафенгауз、Н.Б. ゴーリコヴァ Голикова、А.А. ジミーン Зимин、С.О. シュミット Шмидт、Н.И. パヴレーンコ Павленко、В.И. ブガーノフ Буганов、А.А. プレオブラジェンスキー Преображенский、А.И. ユーフト Юхтら、それぞれの専門分野で20世紀後半の中近世ロシア史研究をリードした研究者達だという点である。彼らはいわゆる「プロ」の軍事史家ではない。

また1969年の論文集は、ソ連期を代表する軍事史家

- 2 こうした記念年に合わせての研究・刊行ブームは、革命前にも共通する現象だった。ポルタヴァ会戦200周年に当たる1909年には、当時の代表的な軍事史雑誌『軍事集成（Военный сборник）』において同会戦の特集が組まれている。Юнаков（1909）や Янчук（1909）など、より一般的な史学系の雑誌にも同様の記事が現れた。ちなみに、この時期のポルタヴァ会戦への注目は、直前の日露戦争の敗北から関心を逸らす意味もあったと考えられる。
- 3 彼に関する評価の高さは、Бескровный（1958）が現在も、軍事史研究において参照すべき古典とされている点にもうかがえる。なお1959年の論文集でも、彼が編者の一人を務めている。

ベスクローヴヌイ Л. Г. Бескровный の生誕60周年を記念した成果だが³、その冒頭に記された略歴によれば、1905年生まれのベスクローヴヌイは、むしろ継続的に教育畑で経験を積んだ人物だった。1942年に第2次世界大戦に参加し、1943年以降、射手・機関銃学校やフルンゼ名称陸軍アカデミーで軍事史の教鞭をとるようになるまで、軍での勤務経験や軍関連機関との接点はほとんどない。その彼の指導を受けて、さらに後進の軍事史家達も育っていったとされ、それらを勘案すると、ソ連の軍事史学は、阪口の整理とはやや異なる形で発展していたと見ることができるだろう。

ただし、こうしたアカデミックな特色がありながら、必ずしも近世ロシア軍事史がソ連史学において大きな流れとなり得なかったのには、むしろ別の要因が考えられる。すなわち、マルクス主義的な歴史理解の下、ロシア革命前の君主支配体制に対し基本的に否定的な評価がなされ（あるいは、少なくとも表面的には否定的な評価を強調することを余儀なくされ）、ロマノフ朝期の国家機関や、エリートを中心とする国家勤務者を扱った研究自体が低調であった点がそれである。学界の趨勢も、各時期の社会経済的構造の解明や、臣民による君主・貴族権力への抵抗としての「階級闘争」の分析などが主流となり、先に名を挙げた研究者達の主要な関心も本来これらの領域にあった。そして君主制下の軍隊はむしろ、臣民の収奪・抑圧の装置とされ、積極的な意義を与えられることはまれだったと言える。無論、国制史・政治史・軍事史については、すでに革命前に詳細かつ膨大な研究の蓄積があったため、それらを正面から乗り越える上で必要な、強固な研究関心や要請が乏しかった点が影響したことも考えられる。

こうした、ソ連期に見られた傍流的な軍事史研究の位置づけが大きく変化した事実を象徴するのが、次の点である。

(2) 『軍事史雑誌』に見られる変化

1939年創刊のソ連誌『軍事史雑誌 (Военно-исторический журнал、以下 ВИЖ と略記)』は、現在まで刊行が続く、ロシア軍事史研究の重要な発表媒体の一つである。参謀本部が編集し国防省が発行する同誌が、主としていわゆるプロの軍事史研究者の活躍の

場であったことは疑い得ない。こうしたプロの論稿に加え、ソ連人民による最大の偉業としての第2次世界大戦（ソ連・ロシアでは「大祖国戦争」と呼ばれる）評価を背景に、その参加者らによる体験談も紙面で大きな割合を占めていた。いずれにせよ、1991年のソ連解体までは、冷戦期の戦術・戦略の考察も含め、現代史・同時代史に関する記述がほとんどだった。

この雑誌の傾向が大きく変わるのが、1990年代中葉以降である。末尾に付したリストの年代からも分かるように、革命前を対象とした論稿が飛躍的に増加し、18世紀軍事史についても多様な観点からの分析や素材の提供が行われるようになった。紙面の性格もあって、確かに当初は、二次文献からの引用に基づく単なる紹介に留まるような記事も多く、筆者も現役・退役の士官が主体だったが、次第に歴史学修士および博士の学位を持つ執筆者が中心になると共に、アーカイブ史料を利用した分析的な成果も現れるようになっていく。論稿個々の分量はそれほど多くなく、列挙するのはやや冗長のきらいもあるとはいえ、変化の方向性を端的に示すものとして文献リストに入れた。

この新たな動向については、やはり帝政期に関するソ連解体以降の評価の転換が大きく寄与しているだろう。かつては概して否定的に扱われた「専制」体制下の時期についても、当時の政府やエリート層による国益への貢献を客観的に評価する態度が一般化し、それに合わせて君主や寵臣の伝記、貴族研究などの刊行も急増したのである⁴。

こうした軍事史研究の変化は、ひとえに『軍事史雑誌』のみに目撃されるものではなく、ロシアの歴史学界全体に共通する現象だった。以下ではこれら近年の変化の特色について、個別のテーマに踏み込みながら検討することにしたい。

(3) 従来の研究領域

I-aに挙げたように、個々の戦闘の過程や各部隊による戦術、使用装備の解説など、狭義の軍事史研究に近いテーマを扱ったものも依然数多く存在する。中でもポルタヴァ会戦を初め、北方戦争に関連する文献が多い (2-3, 5-6, 12-14, 17, 19, 24, 27)。無論これは、ロシアにとっての栄光の歴史としての評価によるところが

4 こうした近年の専制研究全般の変化の動向と特徴については、田中 (2012)。

きいが、それと関連して史料の発掘・刊行も進んでおり、これらは単にロシア軍の活躍のみならず、当時の問題性も露呈する性格を含むなど、研究を深化させるための基盤がより拡張されつつあると言える（8, 22, 23）。

例えば、1711年にピョートル1世軍がオスマン帝国の大軍に包囲され敗北した「プルート河畔（現モルドヴァ領）の会戦」についても、モノグラフを初め複数の論稿が現れている（4, 7, 10, 15）。このように、必ずしもロシア軍の肯定的側面ばかりが強調されているわけではなく、時には対戦国の史料を用いるなど、複数の立場からの相補的な分析を試みる例も見られる（2）。

また北方戦争期のロシア・スウェーデン双方の捕虜の生態に関する共同研究など、ソ連期には困難であった国際的プロジェクトの所産も公刊されており、ロシア史学の変化を象徴する動きと言える（21）。

I-dのような軍事指導者、とりわけ軍事的英雄の活動と生涯も古典的なテーマであり、特に革命前には陸海軍双方の指揮官層も伝記的記述の対象となることが多かった⁵。ソ連期には「歴史に対する個人の役割」が議論となったこともあってか、いささか低調となったものの、近年軍事の分野に限らず、革命前に活躍したエリート各人の伝記的研究は活発な分野となっている⁶。

リストからも明らかなように、武官の中では突出して、アレクサンドル・スヴォーロフ Александр Суворов（1729～1800）、ミハイル・クトゥーゾフ Михаил Кутузов（1745～1813）、そして海軍提督フョードル・ウシャコフ Федор Ушаков（1744～1817）の人気の高い（121, 123, 133, 142-144, 147, 153）。いずれも卓越した軍事的才覚で知られる上に、18世紀末以降のフランス革命戦争やナポレオン戦争（ロシア史の文脈では「祖国戦争」と呼ばれる）といった、ロシアのみならずヨーロッパ大陸全体の命運を左右する大舞台で活躍した点が大きいだろう。それに加え、18世紀末ともなると軍

事の専門性が強まる中で、彼らがロシア有数の将官として声望を得つつも、中央官庁や宮廷とは一定の距離を置く存在に留まった点も、評価の揺らぎを抑える方向に働いたと考えられる⁷。こうした祖国戦争への好意的評価は、ソ連期から続く著名な人物伝シリーズ『非凡な人物の生涯（ЖЗЛ）』において、相次いでロシア軍将官の伝記が刊行されていることにも象徴されるが、これは2012年が祖国戦争200周年に当たることとも関係しているだろう（117, 120, 124, 140）。

これに対し、18世紀のロシア官界においては、武官と文官の区別が曖昧であり、双方を行き来したり、同時期に兼務したりする状況がむしろ一般であった。それゆえ武官の中には、軍事的功績を契機に君主の恩寵にあずかり、「寵臣（фаворит, временщик）」として中央で権力を振るう者も存在した。18世紀前半のアレクサンドル・メーンシコフ Александр Меншиков（1673～1729）、そしてエカチェリーナ2世（1729～96、在位1762～96年）期のグリゴリー・ポチョムキン Григорий Потемкин（1739～91）はいずれも「神聖ローマ帝国最高公爵（светлейший князь）」の称号を授けられた点で共通するが、まさにこうした寵臣の典型と見なされる。

ソ連史学において、彼ら寵臣達への評価は概して低く、研究文献自体ほとんど刊行されない状況だった。しかしソ連解体以降、とりわけポチョムキンに関し、エカチェリーナ改革全般を補佐した重臣として評価が反転する中で、多数の研究書・史料集が刊行されるなど、大きな変化が見られる。彼の活動は、一介の前線指揮官としてのものに留まらず、親イギリス政策の立案といった外交面を含む中央政府での政策決定、さらには第1次ロシア＝トルコ戦争（1768～74年）を通じて併合された新領土の総督（генерал-губернатор）としての、クリミア半島の開発や黒海艦隊の創設への尽力など、多岐に及んだ（119, 125-129, 138, 164, 165, 171）。メーンシコフについても、伝記的研究に留まらず、時期的欠

5 代表的なものとして、Бантыш-Каменский（1840）。このような革命前の研究成果のリプリントやオンデマンド復刊が近年多数現れているのも、ソ連解体前後からの目立った傾向である。

6 各人を単独で扱うものばかりではなく、複数の個人を並置することにより、特定の機関やグループの性格や、時代の特徴を描き出そうとする collective biography の手法も盛んである。例えば、1720年代以降捜査機関を統括した元老院検事総長（генерал-прокурор）職を扱ったものとして、Звягинцев&Орлов（1994）。

7 ただしロートマンは、単なる軍事指導者としてではなく、18世紀前半とは異なる「人とは違った個別的な道、個人的な行動を取りたいという欲求」を持つ、1760年代から世紀末にかけての新しい世代を代表する存在としてスヴォーロフをとり上げ、軍事行動を含む彼の言動やテクストをもとに、当時の貴族エリートの複雑な内面性を探る対象として彼を用いたりもしている。（Лотман（1994, PP.254-286））。

落はあるものの1716年以降の行動記録が刊行され、当時の軍事行動の実態や政策決定過程のメカニズム、さらには上流社会の日常生活を知るための格好の素材となっている(118, 151, 166)。こうした研究状況を見るに、まさに彼ら寵臣による君主権力の補完の側面も総合する形で、それぞれの時期の中央政府の特徴や能力を捉えようとする視点が定まりつつあると言える。

これら従来から知られた軍事指導者、いわば「ビッグネーム」の再評価の一方で、特定の分野で活躍した武官の発掘の動きも見られる。例えば、1647年にロシアでの勤務を選択したスコットランド貴族を父に持つヤーコフ・ブリュース Яков Брюс (1670～1735) は、ナルヴァの敗戦で失われた大砲の再生を主導すると共に、ロシア砲兵隊の基礎を築いた指導者として、さらには印刷技術の発達に貢献したテクノクラートとして、その活動が改めて注目されている(130, 136, 163)。また18世紀後半に同じく砲兵隊で活躍したピョートル・メリシノ Петр Мелисисно (1726～97) も、ロシア国外にルーツを持つ。彼の父イヴァンはイオニア海のケファロニア島出身であり、ピョートル1世期に医師としてロシアでの勤務を開始し、そのまま同国に定着した(145, 152)。ちなみに18世紀は啓蒙の世紀と称され、その特徴の一つとしてコスモポリタニズムが挙げられるが、このようにロシアに定着する外国人エリートの行動様式から判断する限り、必ずしもそれが各地を短期間で移動する浮遊性とは同義ではなく、むしろ固定的なアイデンティティを求めている行動であった可能性を示唆するように思われる。

他にも陸海軍双方の指揮官に対する分析・紹介は多様化しており⁸、こうした研究対象の広がり、従来それほど日の目を浴びていなかった個人、時に「二流」の人物への関心が近年の歴史学で高まっている状況と重なり合うものがある。この点に象徴されるように、テーマそれ自体は従来から継承されたものも存在しながら、ソ連解体以降の軍事史研究の中には、やはり新たな関心に基づくアプローチや具体的対象の選定の傾向が見出せると言えよう。

(4) ロシア史学と新しい軍事史研究

ここで、冒頭に挙げた阪口による整理と文献リストとを対照してみると、近年の18世紀ロシア軍事史研究が、新しい軍事史研究の方向性をほぼ網羅する形で進展していることが分かる。第1のカテゴリー、すなわち新たな視点からの「軍隊や戦争そのもの」の分析については、前節で紹介した内容に加え、主として I-c、II-e および h で扱われている。また第2のカテゴリー「軍隊とその他の歴史の領域との相互の関係」についても、II-j、III-k および l を中心に多くの成果が公にされている。ただし II-f の補給の問題などは、軍内での将兵の日常生活と不可分である一方で、税や物資の徴発量の配分、物資の運搬、駐屯地での売買など、社会全般とも必然的に関係する点で、いずれかに区分するのは困難だろう。なお後者の側面は、社会経済史や数量的分析を得意としたソ連史学において、皇帝政府による人民の搾取の実態を探るとの目的には立ちつつも、むしろ以前から大きな関心が寄せられてきた問題であり、そうしたソ連期の研究成果の吸収についても十分に目配りする必要がある⁹。

また II-i の武官の養成においても、駐屯地での教練や戦場での実体験以前に、各種軍学校や幼年学校での教育の問題など、ある意味で軍隊と社会の狭間のマージナルな領域が対象とされており、双方のカテゴリーに関連する内容と言える。例えば貴族子弟のみに入学を許可された軍の幼年学校(кадетский корпус)でも、地域の貴族所領で生活してきた少年達をいわば公人に変貌させる場として、またそこで受けた多種の教育が、後の文官業務や文化活動に一定の影響を及ぼす可能性を持つ場として、まさに一般社会と密接に関係する空間と捉えられる。このように軍の日常的な運営と一般社会とが多種多様に絡み合っている点にこそ、近年の軍事史研究者が主張するように、近世ヨーロッパ社会の理解にとって軍事史研究がいかに必須の分野であるか、象徴されていると言えよう。

以下では、このようにロシアにおける研究動向が新しい軍事史研究と接合可能である点を前提として、幾

8 例えば、17世紀後半からロシアで勤務し、ピョートル1世の盟友としても知られる P. Gordon についても、ジャコバイトとの関係を指摘する、新たな視点からの研究が現れている(159)。

9 代表的なものとして、Анисимов (1982)。この中でも詳細に分析されているように、ロシアの人頭税は陸軍の運営費用の捻出を主目的に導入された制度であり、それが臣民の経済活動のみならず、国家による統合の深化や身分的枠組の再編に通じる可能性をはらんだ点にも、軍隊とロシア社会との間の密接な関係が示唆されている。

つかのトピックでの成果の紹介を通じ、軍事史研究の可能性について考察することにしたい。

(5) 新しいテーマ①——軍内の多様性——

近世ロシア軍事史研究の成果の中で近年とりわけ目立つのが、I-cに代表されるところの、軍の多様な編成への注目である。もともと17世紀後半のロシア軍においては、それまで陸軍の中核を占めていた貴族騎兵軍に代わり、外国人傭兵を士官として、ロシア人の徴兵・義勇兵から編成される新式軍隊が主力の一端を担うようになった。しかしこの士官・兵士は双方とも、戦役が終了すると解散させられ、必要が生じた時に再度新たな人材を集める形式をとっていたため、軍事的な経験を蓄積するには不適な存在でもあった。それゆえピョートル1世は、スウェーデンとの開戦を意識した1699年末より、兵役義務を無期限とする方法に切り替えることになる¹⁰。いわゆる常備軍の設立である。その後、ロシア陸軍は大きくは、前線勤務を担う野戦連隊と国内・辺境の防備を担う守備連隊とに区分され、さらに前者については、歩兵連隊と竜騎兵連隊に大別した上で、少数の砲兵隊を加える形での構成が基本形とされた。ちなみに、こうした正規軍の編成過程についても、I-bやb'に分類した成果を中心に研究の深化の状況が見られる。

とはいえ、17世紀までの傭兵運用の伝統、さらに辺境地域に居住するカザークから成る騎兵軍の動員は、ピョートルによる軍制改革以降も完全に消滅したわけではなかった。むしろカザーク騎兵は18世紀を通じて、独自の部隊を組織し、実戦で重要な役割を果たし続ける(100, 103, 104, 106, 108, 109)。また近年の研究によれば、ロシア南方の遊牧民、さらに政府の勧誘に応じたアルメニア人やギリシア人、バルカン半島のスラヴ系民族も、個別の集団としてロシア軍での勤務に参加していた(101, 102, 105, 107)。すなわち、ピョートル改革以降ロシア軍の組織化の動きが模索されつつも、実際には非均質性が維持されていた構図が、現在強調される傾向にあると言える。

こうしたロシア軍の性質は、最近の日本でも活況を

見せている、帝国論の文脈でのロシア研究と重なる部分が多い。ただし軍内の多様性に関しては、必ずしもロシア固有の特徴と言いきれるかどうか、その点は比較史的な検討が必要となるだろう。近世ヨーロッパ国家については、1970年代以降、身分的・地域的多様性を前提とし、むしろ国家統合の困難と限界を指摘する傾向が強い¹¹。常備軍の形成に一定の統合化機能があることは確かだが、ロシア陸軍の特性を何か特殊な現象として切り離すのではなく、それを契機に、他国の軍隊の編成を改めて見つめ直してみる論点も重要と思われる。

(6) 新しいテーマ②——非戦闘員の存在——

傭兵を主体とした17世紀までのヨーロッパに顕著のように、軍隊とは必ずしも戦闘員のみで構成された集団ではなかった。鈴木(2003)によれば、傭兵個々人はしばしば家族を部隊に帯同し、その中で日常生活を営んでいたとされる。この他にも、従軍商人、料理人、手工業者、御者、車力、家畜番、占い師、護符売り、博徒、墓堀り人夫など、多様な任務を担う雑多人々が介在していた。18世紀以降、各国の軍隊が常備軍化される過程で、例えば物資の運搬に関しても「輜重兵(обозной)」と呼ばれる専門の役職が法的に規定されたように、こうしたマージナルな存在は急速に減少したものと推測されるが、軍内に非戦闘員が混在した点は基本的に変わらない。ピョートル1世が1711年にロシアで初めて制定した陸軍の定員規定(штат)を見ても、非戦闘員(не фрунтовой)として筆耕(писарь)、オーボエ奏者(гобоист)、ドラム奏者(барабанщик)、医師(лекарь)、憲兵(профос)、鍛冶工(кузнец)、従卒(денщик)、組立工(слесарь)、獣医(коновал)、大工(плотник)、御者(извозчик)が正式の隊員として計上されている(Полное(1830, PP.1-7))。

II-jの内訳からもうかがえるように、この中で最近注目を集めているのが医療の問題である(241-244, 246-248)。近世は、科学的知識に基づく新しい治療法と民間に継承されてきた伝統的療法との間のせめぎ合いが次第に顕在化する時期であり、医学史は伝統と近代化の

10 ただしこの問題については、ピョートルが当初から終身義務化を構想していた点を示す材料はなく、ナルヴァの敗戦とその後迅速な軍再編の必要とから、いわば崩壊的に兵士の帰村が禁じられたとの見方もある。少なくとも農民兵士を送り出した領主の側では、一定期間の勤務後、彼らが帰郷することを当然視していたとされる(Рабинович(1969, P.231))。

11 代表的な主張として、二宮(1979); Koenigsberger(1989); Elliott(1992); Gustafsson(1998)。

相克を象徴する素材としても、歴史学全般において近年多くの関心を集めている。まさにロシアでも、軍務の円滑な遂行にとって西洋医学を必須と捉えたピョートル1世の下で、外国人医師を招聘する形での医療機関の拡充が開始されることで、こうした相克の起点が築かれたと言える。

ただし惜しむらくは、その多くが戦地から離れた都市の軍病院の研究に留まる点である。先述のように、各部隊には軍医の帯同が前提とされ、海軍でも艦船に船医の活動の空間が準備されていたともされるが(249)、彼らがいかなる出自で、具体的にどのような治療を施していたのか、史料の不足もあってか、いまだ解明されているとはいいがたい。軍隊の日常的活動の実態を探る、有効な切り口の一つとなるだろう。

ちなみに、冒頭の阪口の整理にもあったように、日常史(ロシア語では *повседневная жизнь*)への関心は、近年の西洋史学全般に見られる傾向だが、ロシア史学でも急速にこの観点からの研究成果が増えている状況がある。それゆえ軍事指導者に留まらず、より下層の士官を対象とした伝記的研究なども現れてはいるものの(180)、II-e 全体の数にうかがえるように、他の時期と比べ、18世紀軍事史については士官や兵士の具体的生活の分析は依然手薄な状況が見られる。このように全般的に情報が乏しい中で、カルプーシシェンコの論文は、1710年代前半の一般野戦連隊への補給の実状に関する史料を紹介すると共に、当時の兵士の食生活を解説した点で、非常に示唆に富む。この中では、時に自己調達に委ねられるなど食料の入手の面のみならず、調理の環境の劣悪さが指摘され、頻繁に下痢などの症状を引き起こした事実が記されているが(189)、これらが将兵の健康状態に否定的な影響を及ぼしたことは容易に推測される。嘆願書や医療証明書を分析した Фаизова(1999)によれば、こうした過酷な環境の下で、18世紀前半のロシア武官は心身双方の多様な疾病に悩まされることになった。これらの不調が生じた場合に、現場ではどのような対処がなされたのか。ロシアの伝統社会から切り離されて徴用された兵士達の意識や世界観に対し、それが及ぼした具体的な作用を

探ることは、軍隊と社会との相互関係を探る上で意義深いテーマとなるものと思われる。

また軍隊と女性との関係は、近世のジェンダー観を探る上で重要な論点となる。この点でもピョートル期が変化の起点となっており、彼が起草した『陸軍操典(Военный устав)』(1716年)において、軍病院に対する女性の配属が明記された(Законодательство(1997, PP.183-184))。とはいえ、実際に戦場にまで立った女性は19世紀初頭まで現れなかったとされる(245)¹²。その一方で、夫を徴兵の対象とされた家族、いわゆる「兵士の妻」や「兵士の子ども」もまた、否応なく軍隊の影響を受ける存在だった。18世紀ロシアの徴兵制度においては、村落共同体(ミール)で供出者の選抜が行われており、法的には独身者の優先的選出が求められたものの、現実には家族を残して村を去り、生涯戻らぬ者も多かった。残された家族には自由が与えられたとはいえ、男子であればいわゆる「雑階級人(разночинцы)」として社会的上昇のチャンスが得られた一方で、女性はまさに定住先を模索するマージナルな存在となる場合も少なくなかった。兵士の配偶者を指すロシア語普通名詞(солдатка)が存在することからも、こうした立場の女性が一定数存在したことが推測される(236。また簡潔な紹介として67, PP.134-135)。このように軍隊が内部のみならず、その周辺に具体的に及ぼした作用については、これまでも一部成果が見られるものの、徴兵に伴う諸作業が村落に残した亀裂や家族らによる受けとめ方など、まだまだ解明すべき論点は残されているように思われる。

(7) 新しいテーマ③——文化的側面——

1959年の『ボルタヴァ』論集の章題にも見られたように、ソ連史学では必ずしも文化的要素が無視されていたわけではない。とりわけ戦勝を臣民の歴史的記憶に残すための各種の営みについては、以前と同様に近年でも大きな関心が寄せられている(269-271)。そうした中で、最近の大きな変化を挙げるとすれば、軍隊と君主の儀礼・表象との関係への注目があるだろう。

この問題も、ソ連解体による皇帝政府への評価軸の

12 ちなみにデッカー & ポル(2007)によれば、17世紀オランダには男装して水兵や兵士の職務に従事する女性が、少数ながら存在した。とはいえ、あくまで男性を偽っての行動のため、むしろジェンダー的境界が厳格に存在していた事実を示唆する現象とも言える。ロシアでも志願兵は認められていたが、先述のように勤務環境は劣悪であり、敢えて軍務を選ぶメリットは乏しかったと考えられる。

転換と関係を持つものと思われる。かつて宮廷による乱費や腐敗と認識されていた事象や行動様式は、むしろ君主の権威を高め、帝国内の多様な諸分子を統合する手段として、積極的な意義を認められるにいたった。18世紀ロシアに関する宮廷儀礼・国家儀礼の本格的な研究は、Wortman (1995) を嚆矢とするが、その後ロシア本国でも続々とモノグラフが公刊される状況が生じている¹³。2009年の『ポルタヴァ』論集の第3部にも、同会戦と関連する入市式や祝祭についての分析が含まれるほか (20)、ロシア宮廷における戦士のシンボルの活用など、軍隊と君主の権威との関係に着目した研究は多い (264)。戦勝を讃える頌詩の解説など、すでに文化論的な方法との接合も試みられており、この分野については今後とも領域を横断する形でさらに発展することが予想される。

3. 欧米史学の動向と日本

上記のようなロシア本国での動向を踏まえて、以下、欧米史学の方角性や特色について確認することにした。欧米諸国のロシア史家により2002年に刊行された論文集『ロシアにおける軍隊と社会』の序言では、ロシア軍事史研究について「戦闘、戦術、そして制度としての軍隊は歴史家達から一定の関心を集めてきた一方で、軍隊と社会との関係に関し、他国の歴史学に顕著な持続的な性格の研究や議論は、ロシア史の場合希薄だった」とまとめられている (Lohr&Poe (2002, P.xv))。これは他地域に関する新しい軍事史研究の状況を意識し、それとの問題関心やアプローチの接合を図った評言と考えられるが、これまで見たソ連・ロシア本国における研究状況、特に1990年代後半の成果を見る限り、やや過小評価と言えなくもない。

また欧米においても、J. H. L. Keepのように、比較的早い時期から軍隊と社会との関係について検討してきた研究者も存在する。1995年刊行の論文集 (61) においては、個別にリストには挙げていないものの、1970年代末から80年代前半に書かれた軍事史関連の論文7本が収録され、エカチェリーナ2世期のヤロスラーヴリ連隊を構成した人員の具体的経歴の整理や、パーヴェル1世とその政府に対する軍隊的精神の影響など、

Keepが多様な観点からの軍事史研究を進めてきた点を示唆する構成となっている。

社会経済史家 R. Hellie もまた、Hellie (1974) のように、ピョートル1世による軍事改革が社会に及ぼした全般的衝撃を考察すると共に、1990年には軍事技術の変遷が中近世ロシア社会の階層分化を促進する働きを果たした可能性を論じたりもしてきた (58)。さらに本稿の対象からは外れるが、19世紀軍事史については早くからモノグラフの形で成果も複数刊行されており、これらの研究の意義を改めて汲み出す必要がある。

その一方でリストの年代からも明らかなように、2000年代以降、欧米史学における近世ロシア軍事史研究が一層の活発化を見せていることもまた事実だろう。その中心とも言える J. Hartley は、近世イギリス史家 Brewer (1989) により提唱された「財政＝軍事国家 (Fiscal-military state)」の概念に留意しつつ、18世紀後半を中心に、ロシア国家全体の性格について包括的な議論を展開している (56, 57)。

このように欧米史学の場合、個別事例研究というよりは広い観点からの考察が多く、それゆえに個別の領域に分類することが困難な結果、リスト I-b に成果が集中する形となっている。また I-a に入れた Moulton の近著も、従来軽視されがちであったポルタヴァ会戦以降の戦闘の意義に着目し、とりわけ1710年代末のロシア軍による遠征と勝利が、当時北方戦争への介入の意思を強めていたハノーファー選帝侯＝イギリス国王 George I (後者としては在位1714～27年) を抑制する外交的効果を及ぼした点を論じるなど、戦術論に留まらない知見を提供している (33)。

ただし II-e や h に見られるように、個別事例研究が乏しい影響か、軍隊内の日常生活や兵士の心性に関する成果は思いのほか少ない。その中では Ryan 論文が、表面的には世俗化を目指したピョートル1世期の軍隊の中で、正教や呪術に由来する伝統的風習が力を持っていた事実を示す点において、改革の実際の浸透力を考察する材料となる (214)。今後この分野が欧米史学においても伸長するのか、それとも個別事例研究が少ないのは、「外国史」としてロシア史を研究する立場における必然の結果なのか、定かではないが、ロシア史学との大きな相違点の一つと言えよう。

13 この点についても、田中 (2012) を参照のこと。

これとは逆に、やや関心の重なる領域としては、辺境地帯に対する注視の傾向が目立つ。近年の帝国論の文脈で活発な、ロシア帝国のユーラシア的性格を強調する潮流の中で、特に南部や東部への拡張の過程に視点の中心を据え、主としてステップ地帯でのロシアの軍事的プレゼンスの観点から国家の軍事政策や安全保障政策の性格を考察したり、それらに具体的に関与するカザークや郷土（однодворцы）の実態を再考したりする方向での成果が連続して現れている（52, 53, 64, 66, 109-112, 263）。

こうした視点は、18世紀ロシア軍における非均質的要素としてのカザーク部隊の位置づけを論じた、日本の豊川浩一の論点とも重なるものだろう（113）。ただこうした個別の論稿もあるとはいえ、ロシア・欧米と比較して、日本の西洋史学におけるロシア軍事史研究は、いまだ活況とは言いがたい。16～17世紀を専門とする浅野明、19世紀を専門とする松村岳志による一定の成果もあるものの、今後とも研究の量・質双方でさらに一層の進展が待たれる分野と言わねばならない。

4. 結びに代えて

本稿では、近年における広義の軍事史研究の伸長を踏まえ、ソ連・ロシア本国の動向を中心に、「長いロシアの18世紀」を対象とする軍事史研究の成果について、その特徴を整理してきた。本文中の遺漏は多いが、それを補う意味でも末尾のリストを御参照いただければ、と思う。

これらの成果のみでも、すでに十分に圧倒されるだけの蓄積があることが分かるが、そうした現時点での研究がいまだ参照すべき典拠として重視するものに、革命前の膨大な成果が存在する。本稿の論題ではないため、詳細には立ち入らないが、それらの中には、必ずしも戦史に特化した内容に留まらず、給養のシステムや兵士の日常史など、むしろ広義の軍事史研究と重なる部分を持つものも多い。今後こうした研究についても具体的内容を整理しつつ、研究史上の位置づけについて明確にすることで、ロシア軍事史研究をさらに深化させる必要があるだろう。

※本稿は、平成23年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究〔共同利用

型〕」（北海道大学スラブ研究センター）の成果の一部である。

5. 18世紀ロシア軍事史文献リスト

I. 戦闘に直接関連する分野

a. 個々の戦闘や戦術の解析

1. Акуленко В. П. Боевые действия русской армии в коалиционных войнах конца XVIII – начала XIX века // ВИЖ. 2009. №7. С.3-10.
2. Артамонов В. А. Осада Полтавы в 1709 году (по шведским источникам) // Вопросы истории. 2004. №11. С.112-121.
3. Артамонов В. А. «Мать Полтавской баталии». К 300-летию сражения между русскими и шведскими войсками при белорусской деревне Лесной 28 сентября (9 октября) 1708 года // ВИЖ. 2008. №9. С.46-52.
4. Белова Е. В. Православные народы Австрийской и Османской империи в Прутском походе 1711 г. // Вопросы истории. 2009. №10. С.149-152.
5. Беспалов А. В. Северная война. Карл XII и шведская армия. М., 2000.
6. Беспалов А. В. Судьба шведского отряда генерал-майора К. Г. Рооса в сражении под Полтавой // ВИЖ. 2011. №11. С.56-61.
7. Водарский Я. Е. Загадки Прутского похода Петра I. М., 2004.
8. Гистория Свейской войны (Поденная записка Петра Великого). В 2-х выпусках. М., 2004. (史料集)
9. Дегтярев А. П., Семин В. П. Военная история России: Внешние и внутренние конфликты: Тематический справочник с приложением схем военных действий. М., 2011.
10. Ефимова С. В. Прутский поход 1711 года в воспоминаниях шотландского офицера на русской службе. // ВИЖ. 2011. №9. С.20-25; №10. С.16-20.
11. Ионов П. П., Симаков В. И. Ратная слава Отечества. Кн.2. Войны эпохи Петра Великого и Екатерины II (Военная история России XVIII в.). М., 2000.
12. История Северной Войны 1700-1721 гг. М., 1987.

13. Кротов П. А. К вопросу о силах и тактике русского флота в гангутском сражении 1714 года // История СССР. 1990. №6. С.137-150.
 14. Кротов П. А. Гангутская баталия 1714 года. СПб., 1996.
 15. Кутищев А. В. «Итить с войском к Дунаю». Прутский поход – героическая трагическая страница российской истории // ВИЖ. 2011. №9. С.17-19.
 16. Лапин В. В. Стратегия русской армии в кавказских войнах XVIII – XIX веков // ВИЖ. №12. 2007. С.20-21.
 17. Майоленко Ю. Е. Артиллерийское обеспечение осады Риги русскими войсками в 1709-1710 гг. // ВИЖ. 2010. №7. С.25-27.
 18. Овчинников В. Д. «Ахтияр – лучшая гавань в свете» // ВИЖ. 2003. №5. С.73-74.
 19. Павленко Н. И., Артамонов В. А. 27 июня 1709. М., 1989.
 20. Полтава. К 300-летию Полтавского сражения. Сборник статей. М., 2009.
 21. Полтава: Судьбы пленных и взаимодействие культур. М., 2009.
 22. Полтавская битва 27 июня 1709 года: Документы и материалы. М., 2011. (史料集)
 23. Северная война 1700-1721 гг. К 300-летию Полтавской победы. Сборник документов. Т.1 (1700-1709 гг.). М., 2009. (史料集)
 24. Славнитский Н. Р. Осадные операции русских войск в годы Северной войны // ВИЖ. 2010. №1. С.3-8.
 25. Собко Е. М. Участие России в войне за австрийское наследство 1740-1748 гг. в отечественной историографии // Вопросы истории. 2012. №1. С.166-172.
 26. Торопицын И. В. Борьба с пиратством на Кавказе в 1730-1740 гг. // ВИЖ. 2011. №10. С.59-63.
 27. Широкопад А. Б. Северные войны России. М.-Минск, 2001.
 28. Englund, P., *The Battle That Shook Europe: Poltava and the Birth of the Russian Empire*, London 1992.
 29. Frost, R. I., *The Northern Wars 1558-1721*, Harlow 2000.
 30. Keep, J. L. H., *The Russian Army in the Seven Years War*, in Lohr, E., Poe, M. (eds), *The Military and Society in Russia, 1450-1917*, Leiden 2002, PP.197-220.
 31. Konstam, A., *Poltava 1709: Russia Comes of Age*, London 1994.
 32. Marston, D., *The Seven Years' War*, Oxford 2001.
 33. Moulton, J. R., *Peter the Great and the Russian Military Campaigns during the Final Years of the Great Northern War, 1719-1721*, Lanham 2005.
 34. Szabo, F. A. J., *The Seven Years War in Europe, 1756-1763*, Harlow 2008.
 35. 阿部重雄『タチーシシェフ研究——18世紀ロシア一官僚＝知識人の生涯と業績——』(刀水書房 1996年)。
- b. 軍全体に関わるシステム・制度の整備**
36. Артамонов В. А. Петр I и регулярная армия // ВИЖ. 1992. №9. С.2-9.
 37. Артамонов В. А. Русская армия после Петра I // ВИЖ. 1997. №3. С.42-49.
 38. Военная история Отечества с древних времен до наших дней. Т.1. М., 1995.
 39. Волкова И. В. Военное строительство Петра I и перемены в системе социальных отношений в России // Вопросы истории. 2006. №3. С.35-51.
 40. Завражин А. В. Влияние петровских преобразований на развитие России и укрепление ее вооруженных сил // ВИЖ. 2007. №6. С.23-27.
 41. Копылов И. А. От регулярных войск к регулярной армии. О дате создания Российской Армии // ВИЖ. 1999. №1. С.63-67.
 42. Леонов О. Г., Ульянов И. Э. Регулярная пехота: 1698-1801. М., 1995.
 43. Мацуленко С. А. Военные реформы Петра I // ВИЖ. 1988. №5. С.83-87.
 44. Мацуленко, С. А. «Не подлежит ослабевать в военном деле». О роли Петра I в создании Российской армии // ВИЖ. 1999. №1. С.2-9.
 45. Петрухинцев Н. Н. Царствование Анны Иоанновны: формирование внутривосполитического курса и судьбы армии и флота 1730-1735 г. СПб., 2001.

46. Трамбицкий Ю. А. Чины и звания русской армии // ВИЖ. 1991. №9. С.85-93.
47. Федоров В. Ф., Терещенко А. В. Какая армия нужна России? Об историческом опыте комплектования Вооруженных Сил РФ и его месте в современной военной реформе // ВИЖ. 2002. №2. С.2-5.
48. Шенелев Л. Е. Чиновный мир России XVIII – начало XX в. СПб., 1999.
49. Шилов А. И. Привлечение иностранных граждан на военную службу в России // ВИЖ. 2010. №4. С.31-35.
50. Ağoston, G., Military Transformation in the Ottoman Empire and Russia, 1500-1800, *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History*, Vol.12 No.2, 2011, PP.281-319.
51. Bushkovitch, P., The Politics of Command in the Army of Peter the Great, in Van der Oye, D. S., Menning, B. W. (eds.), *Reforming the Tsar's Army: Military Innovation in Imperial Russia from Peter the Great to the Revolution*, New York 2004, PP.253-272.
52. Davies, B. L. *Warfare, State and Society on the Black Sea Steppe, 1500-1700*, London 2007.
53. Davies, B., *Empire and Military Revolution in Eastern Europe: Russia's Turkish Wars in the Eighteenth Century*, London 2011.
54. Duffy, C., *Russia's Military Way to the West: Origins and Nature of Russian Military Power 1700-1800*, London 1981.
55. Dunning, C., Smith, N. S., Moving beyond Absolutism: Was Early Modern Russia a “Fiscal-Military” State?, *Russian History*, Vol.33 No.1, 2006, PP.19-43.
56. Hartley, J., *Russia, 1762-1825: Military Power, the State, and the People*, Westport 2008.
57. Hartley, J., Russia as a Fiscal-Military State, 1689-1825, in Storrs, C., *The Fiscal-Military State in Eighteenth-Century Europe. Essays in honour of P. G. M. Dickson*, Farnham 2009, PP.125-145.
58. Hellie, R., Warfare, Changing Military Technology, and the Evolution of Muscovite Society, in Lynn, J. A. (ed.), *Tools of War: Instruments, Ideas, and Institutions of Warfare, 1445-1871*, Urbana & Chicago 1990, PP.74-99.
59. Kagan, F. W., Higham, R.(eds.), *The Military History of Tsarist Russia*, New York 2002.
60. Keep, J. L. H., *Soldiers of the Tsar: Army and Society in Russia 1462-1874*, New York 1985.
61. Keep, J. L. H., Soldiering in Tsarist Russia, in Reddel, C. W. (ed.), *Transformation in Russian and Soviet Military History: Proceedings of the Twelfth Military History Symposium U.S. Air Force Academy*, Honolulu 1990, PP.5-20.
62. Keep, J. L. H., *Power and the People: Essays on Russian History*, New York 1995.
63. Pintner, W. M., The Burden of Defense in Imperial Russia, 1725-1914, *The Russian Review*, Vol.43 No.3, 1984, PP.231-259.
64. Stevens, C. B., *Soldiers on the Steppe: Army Reform and Social Change in Early Modern Russia*, DeKalb 1995.
65. Stevens, C. B., Evaluating Peter's Army: The Impact of Internal Organization, in Lohr & Poe (eds.), *The Military and Society in Russia*, PP.147-171.
66. Stevens, C. B., *Russia's Wars of Emergence, 1460-1730*, Harlow 2007.
67. 土肥恒之「国境警備・戦争・入植——近世ロシアの軍隊と社会——」(阪口修平・丸嶋宏太編著『軍隊(近代ヨーロッパの探究12)』(ミネルヴァ書房 2009年) 107-143頁。
- b'. 個別の部門・部隊の編成・特徴
68. Андрейчук С. В. Становление Сибирского копуса в 1745-1771 гг. // ВИЖ. 2011. №3. С.38-42.
69. Беловинский Л. В. Русская гвардия в XVIII – XIX веках // Вопросы истории. 1983. №9. С.94-105.
70. Болтунова Е. М. Гвардия Петра I. Новая сила на политической арене России // ВИЖ. 1997. №3. С.84-88.
71. Волков С. В. Русский офицерский корпус. М., 1993.
72. Гордин Я. Власть и гвардия // Знание – сила. 1991. №11. С.80-87; №12. С.66-72.
73. Гребенщикова Г. А. Екатерина II и развитие военного флота России // Вопросы истории. 2005.

- №4. С.150-155.
 74. Данилов В. С. «Не имея моря, мы принялись за постройку военного флота – для завоевания моря». Формирование корабельных экипажей российского флота в XVIII – начале XX века // ВИЖ. 2008. №11. С.13-17.
 75. Демкин А. В. Лейб-компания Императрицы Елизаветы Петровны (1741-1762 гг.). М., 2009.
 76. Иминов В. Т. Зарождение и становление в России Генерального штаба // ВИЖ. 2003. №1. С.22-28.
 77. Курукин И. В. Персидский поход Петра Великого. Низовой корпус на берегах Каспия (1722-1735). М., 2010.
 78. Майоленко Ю. Е. Русская артиллерия в Азовских походах Петра I и осаде Азова в 1736 году // ВИЖ. 2009. №7. С.11-17.
 79. Майоленко Ю. Е. Вклад русских монастырей в восстановление артиллерии в 1701 г. // Вопросы истории. 2010. №2. С.155-157.
 80. Морихин В. И. Традиции офицерского корпуса России. М., 2003.
 81. Остапенко В. В. От Азова – к Кронштату. Флот Петра I стал важнейшим фактором становления России как великой европейской державы // ВИЖ. 2006. №12. С.24-28.
 82. Петрухинцев Н. Н. Два флота Петра I: технологические возможности России // Вопросы истории. 2003. №4. С.117-128.
 83. Российская гвардия: 1700-1918: справочник. М., 2005.
 84. Семченко В. И. Легкая пехота России // ВИЖ. 1992. №1. С.64-66.
 85. Смирнов А. А. Во главе строительства Черноморского флота // ВИЖ. 1994. №7. С.73-78.
 86. Смирнов Ю. Н. Русская гвардия в XVIII веке. Куйбышев, 1989.
 87. Субботин В. А. Колониальные войска в конце XVIII – начале XX века // Вопросы истории. 2002. №8. С.21-38.
 88. Таланов А. И. Конная гвардия // ВИЖ. 1991. №12. С.64-66.
 89. Шигин В. Органы управления военным флотом России 1695-1725 гг. // Морской сборник. 1993. №6. С.94-95.
 90. Шишов А. Лейб-гвардии Преображенский полк // Военный вестник. 1994. №2. С.84-89.
 91. Шишов А. Лейб-гвардии Измайловский полк // Военный вестник. 1994. №5. С.79-83.
 92. Юркевич Е. И. Совершенствование русской полевой артиллерии в конца XVIII – начале XIX века // ВИЖ. 2011. №10. С.43-45.
 93. Юркевич Е. И. Строевая и боевая подготовка русских артиллеристов в 1796-1891 гг. // ВИЖ. 2011. №11. С.45-47.
 94. Konstam, A., *Peter the Great's Army 1: Infantry*, London 1993.
 95. Konstam, A., *Peter the Great's Army 2: Cavalry*, London 1993.
 96. Konstam, A. *Russian Army of the Seven Years War (1)*, London 1996.
 97. Konstam, A. *Russian Army of the Seven Years War (2)*, London 1996.
 98. Phillips, E. J., *The Founding of Russia's Navy: Peter the Great and the Azov Fleet, 1608-1714*, Westport & London 1995.
 99. 田中良英「18世紀前半における軍隊とロシア貴族 —— 近衛重騎兵隊の創設と活動を中心に ——」(『ロシア・東欧研究』第38号 2010年) 72-88頁。
- с. 「非正規軍」の運用
100. Белова Е. В. Судьба бугского казачества. Конец XVIII – XIX века // ВИЖ. 2008. №3. С.53-56.
 101. Дорджиева Е. В. Калмыцкие нойоны и зайсанги на российской военной службе. XVII – начало XX века // ВИЖ. 2007. №9. С.58-62.
 102. Кибовский А. В. «Невозможно иметь больше мужества, отважности и усердия к службе, колико оное войско изъявило». Балканские славяне на службе в русской армии и флоте. 1775-1797 гг. // ВИЖ. 2008. №7. С.61-65.
 103. Козлов С. Екатерина II и казачество, in Klein, J., Dixon, S., Fraanje, M. (eds.), *Reflections on Russia in the Eighteenth Century*, Köln 2001, pp.32-42.
 104. Леуцев Е. Н. Причины создания Семиреченского

- казацкого войска // ВИЖ. 2008. №11. С.42-44.
105. *Пряхин Ю. Д.* «Вознаградить службу тех греков, кои в архипелаге сражались за Россию...». Переселение в Керчь и Еникале в 1775 году воинов Албанского (греческого) войска // ВИЖ. 2002. №2. С.69-72.
 106. *Ряжнев А. С.* Вероисповедная дипломатия Екатерины II: борьба за возвращение на родину казаков-некрасовцев // ВИЖ. 2010. №10. С.56-63.
 107. *Чекулаев Н. Д.* Армянские эскадроны в составе русских войск. 1723-1764 гг. // ВИЖ. 2008. №12. С.76-77.
 108. *Шкваров А. Г.* Петр I и казаки. СПб., 2010.
 109. *Шовунов К. П.* О развитии казачества в России в XVII – XIX веках // ВИЖ. 1987. №3. С.81-84.
 110. Baumann, R. F., Subject Nationalities in the Military Service of Imperial Russia: The Case of the Bashkirs, *Slavic Review*, Vol.46 No.3/4, 1987, PP.489-502.
 111. Воеск, В. J., *Imperial Boundaries: Cossack Communities and Empire-Building in the Age of Peter the Great*, Cambridge 2009.
 112. Khodarkovsky, M., *Russia's Steppe Frontier: The Making of a Colonial Empire, 1500-1800*, Bloomington & Indianapolis 2002.
 113. 豊川浩一「『植民国家』ロシアの軍隊におけるカザークの位置——18世紀のオレンブルクカザーク創設を中心に——」(『歴史学研究』第881号 2011年) 34-48頁。
 - d. 軍事指導者の伝記・業績
 114. *Алексеев Ю. А.* Екатерина II: «...посоветуйтесь о том с Петром Ивановичем». О жизни и деятельности П. И. Панина // ВИЖ. 1997. №2. С.72-78.
 115. *Андреев А. Р.* Князь Василий Михайлович Долгоруков-Крымский. Документальное жизнеописание. М., 1997.
 116. *Андреев А. Р.* История Крыма. В. М. Долгоруков-Крымский. М., 2000.
 117. *Анисимов Е. В.* Генерал Багратион: Жизнь и война. М., 2009
 118. *Беспярых Ю. Н.* Александр Данилович Меншиков: Мифы и реальность. СПб., 2005.
 119. *Болотина Н. Ю.* Князь Потемкин. Герой эпохи Екатерины Великой. М., 2006.
 120. *Бондаренко А. Ю.* Милорадович. М., 2008.
 121. *Будко А. А., Селиванов Е. Ф.* А. В. Суворов: «Воину надлежит мощь враженскую сокрушать, а не безоружных поражать» // ВИЖ. 2002. №9. С.77-79.
 122. *Вахмистрова С. И.* Генерал-фельдмаршал во флотском мундире // ВИЖ. 2000. №2. С.88-90.
 123. *Вещиков П. И., Пех А. А.* В. Суворов на нестроевых должностях // Военно-исторический архив. №8. 2000. С.4-21.
 124. *Гордин Я. А.* Ермолов. М., 2012.
 125. Г. А. Потемкин. От вахмистра до фельдмаршала. Воспоминания. Дневники. Письма. СПб., 2002. (史料集)
 126. Г. А. Потемкин. Последние годы. Воспоминания. Дневники. Письма. СПб., 2003. (史料集)
 127. *Димов В. А.* Потемкин в жизни. М., 2002.
 128. *Елисеева О. И.* Геополитические проекты Г. А. Потемкина. М., 2000.
 129. *Елисеева О. И.* Потемкин. М., 2005.
 130. *Ефимов С. В.* Повседневная жизнь военачальника петровской эпохи // ВИЖ. 2010. №4. С.54-59; №5. С.58-62.
 131. *Заозерский А. И.* Фельдмаршал Б. П. Шереметев. М., 1989.
 132. *Золотарев В. А., Козлов И. А.* Флотоводцы России. М., 1998.
 133. *Ивченко Л. Л.* Кутузов. М., 2012
 134. *Кириухин А. В.* Бомбардир Петра Великого: Историко-литературный розыск о деяниях одного из «птенца гнезда Петрова», выдающегося русского артиллериста, конструктора и военного инженера XVIII века Василия Корчмина. М., 2001.
 135. *Ковалев С. Н., Аверченко С. В.* Генерал-губернаторы Санкт-Петербурга // ВИЖ. 2003. №6. С.58-63.
 136. *Крылов В. М., Чернухин В. А.* «Шведская пехота...была остановлена русской артиллерией, которая...валила целые шеренги». Видные военачальники во главе российской артиллерии (XVIII – начало XIX века) // ВИЖ. 2004. №4. С.66-72.

137. *Кузнецов С. О.* Строгановы и русская армия. 1745-1814 гг. // ВИЖ. 2006. №12. С.64-67.
138. *Лопатин В. С.* Светлейший князь Потемкин. М., 2004.
139. *Нелипович С. Г.* Позиция Б. Х. фон Мюнниха в дискуссии 1725 года о сокращении армии и военного бюджета России // ВИЖ. 1990. №8. С.3-7.
140. *Нечаев С. Ю.* Барклай-де-Толли. М., 2011.
141. *Овчинников В. Д.* Флотоводческое наследие адмирала Ф. Ф. Ушакова // ВИЖ. 2009. №2. С.22-26.
142. *Овчинников В. Д.* Духовно-нравственное наследие адмирала Ф. Ф. Ушакова // ВИЖ. 2009. №3. С.43-45.
143. *Овчинников В. Д.* «Наши, благодаря Богу, такого перцу туркам задали, что любо». 220 лет славным победам контр-адмирала Ф. Ф. Ушакова на Черном море // ВИЖ. 2010. №7. С.3-9.
144. *Ольховский Е. Р.* «Наш герой-полководец мог казаться своей супруге лишь невзарчным чудачком...». В семейных отношениях А. В. Суворова преследовали неудачи // ВИЖ. 2004. №4. С.73-75.
145. *Ольховский Е. Р.* П. И. Мелиссино – педагог, полководец, артиллерист // ВИЖ. №9. 2004. С.70-72.
146. *Островский А. В.* Генералы-адмиралы российского флота // ВИЖ. 2003. №7. С.71-74.
147. *Остроумов Ю. А.* Некоторые малоизвестные страницы жизни генералиссимуса А. В. Суворова // Военно-исторический архив. №15. 2000. С.133-154.
148. *Павленко Н. И.* Лефорт. М., 2009.
149. *Петросьян А. А.* Шотландский наставник Петра I и его «Дневник» // Вопросы истории. 1994. №9. С.161-166.
150. *Плешаков И. Н.* Император Павел I: «Через Бухарию и Хиву на реку Индус и на заведения английские, по ней лежащие» // ВИЖ. 2007. №12. С.48-51.
151. Повседневные записки делам князя А. Д. Меншикова 1716-1720, 1726-27 гг. // Российский архив. Т.10. М., 2000. (史料集)
152. *Пряхин Ю. Д.* Петр Мелиссино: «Всякое училище, желающее доставить Отечеству граждан полезных, должно их сделать и добродетельными» // ВИЖ. 2002. №4. С.56-67.
153. *Рогоулин Н. Г.* «Полковое учреждение» А. В. Суворова и пехотные инструкции екатеринского времени. СПб., 2005.
154. *Рыбин В. А.* Из дневника генерала П. Гордона // ВИЖ. 1991. №10. С.86-91.
155. *Рыжеников М. Р.* Франц Лефорт – друг и наставник Петра Великого // ВИЖ. 2007. №3. С.58-62.
156. *Скрицкий Н. В.* Побеждая врага практически без потерь. Об адмирале В. Я. Чичагове // ВИЖ. 1997. №6. С.72-79.
157. *Скрицкий Н. В.* Екатерина II. «Он спас Петров и глад, и дом» // ВИЖ. 1999. №1. С.68-75.
158. *Соловьев Б. И.* Генерал-фельдмаршалы России. Ростов-на-Дону, 2000.
159. *Станков К. Н.* Патрик Гордон и партия якобитов в России в конце XVII века // Вопросы истории. 2011. №10. С.108-121.
160. *Строков А. А.* Способы и формы ведения военных действий генералиссимусом А. В. Суворовым (О книге «Во славу Отечества Российского») // ВИЖ. 1986. №6. С.65-69.
161. *Титлестад Т.* Царский адмирал Корнелиус Крюйс на службе у Петра Великого. СПб., 2003.
162. *Успенский В. С.* Павел Александрович Строганов // Вопросы истории. 2000. №7. С.85-103.
163. *Филимон А. Н.* Яков Брюс. М., 2003.
164. *Устинов В. И.* Могучий Великоросс. К 200-летию со дня смерти генерал-фельдмаршала князя Г. А. Потемкина // ВИЖ. 1991. №12. С.70-78.
165. *Шахмагонов Н. Ф.* Храни господь Потемкина. М., 1991.
166. *Шенкман Г. С.* Генералиссимус Меншиков. СПб., 2000.
167. *Шенкман Г. С.* Фельдмаршал Шереметев. СПб., 2000.
168. *Шеремет В. И.* Генерал-аншеф А. Г. Орлов: «На кону стоял весь европейский политик России» // ВИЖ. 1996. №5. С.50-60.
169. *Шишов А. В.* «На негодующий Кавказ подъялся наш орел...». О генерале от инфантерии П. Д. Цицианове // ВИЖ. 1997. №3. С.62-69.

170. Шишов А. В. «Золотые ворота Кавказа» распахнул...генерал-инвалид. О Персидском походе русских войск под командованием генерал-аншефа В. А. Зубова в 1796 году // ВИЖ. 1999. №3. С.65-75.
171. Шляпникова Е. А. «Чтоб способно и полезно употребляема быть могла против всякой армии». О военных преобразованиях в России при Екатерине II и роли в них Г. А. Потемкина // ВИЖ. 1998. №1. С.83-87.
172. Шляпникова Е. А. «Слишком честный и непридворный генерал, для того чтобы получать назначения от фаворитов...»: Юрий Владимирович Долгоруков в войнах второй половины XVIII – начала XIX века // ВИЖ. 2007. №2. С.67-70.
173. Цинцадзе З. Д. «Неизвестный» вам князь Багратион // ВИЖ. 1994. №6. С.88-92.
174. Menning, B. W., G. A. Potemkin and A. I. Chernyshev: Two Dimensions, in Van der Oye, Menning (eds.), *Reforming the Tsar's Army*, PP.273-291.
175. Montefiore, S., *Prince of Princes: The Life of Potemkin*, New York 2000.
183. Вещиков П. И. 300 лет Военному хозяйству – Тылу Вооруженных Сил России // ВИЖ. 1999. №6. С.21-30.
184. Вещиков П. И. «Содержание офицеров нищенское...» // ВИЖ. 2002. №4. С.35-37.
185. Вещиков П. И. Опыт расквартирования войск в Российской империи в XVIII – XIX вв. // ВИЖ. 2011. №1. С.56-60.
186. Гребеникова Г. А. Проблема сохранности корабельного леса в XVIII веке // Вопросы истории. 2007. №12. С.136-141.
187. Данченко В. Г. Особенности обеспечения «мундирным платьем» чинов русского флота в середине XVIII века // ВИЖ. 2011. №10. С.78-79.
188. Дуров И. Г. «Морским офицерам жалованья давать на из 13 месяцев, а дров и домов не давать...» // ВИЖ. 2001. №9. С.47-51.
189. Карпущенко С. В. У солдат в провианте нужды не было: Комментируя старинный рапорт // ВИЖ. 1994. №6. С.83-88.
190. Кириченко А. В., Столыпин С. С. Создание и развитие службы военных сообщений // ВИЖ. 2004. №5. С.55-59.
191. Ломако Е. Л. Развитие мануфактурного дела в Коломне во второй половине XVIII в. // ВИЖ. 2007. №8. С.73-74.
192. Рунов В. А. Престижность профессии офицера в русской армии // ВИЖ. 1991. №6. С.85-90.
193. Яременко В. А. Социальная защищенность военных чинов: от Ивана III до Николая II // ВИЖ. 2005. №6. С.53-59.
194. Bushnell, J., The Russian Soldiers' Artel, 1700-1900: A History and Interpretation, in Bartlett, R. (ed.), *Land Commune and Peasant Community in Russia: Communal Forms in Imperial and Early Soviet Society*, London 1990, PP.376-394.
195. Hartley, J., War and the Merchants: The Great Northern War (1700-21), in Bartlett, R., Lehmann-Carli (eds.), *Eighteenth-Century Russia: Society, Culture, Economy*, Berlin 2007, PP.485-497.
196. Keep, J. L. H., Feeding the Troops: Russian Army Supply Policies during the Seven Years War, *Canadian*

II. 軍の運用や補給に関連する分野

e. 軍内の日常史

176. Быт русской армии XVIII – начало XX века. М., 1999.
177. Гринев А. В. Русские военные моряки в Новом Свете // ВИЖ. 2011. №2. С.65-69.
178. Капитонов А. П. Ганнибалу – деревеньку, Пушкин – в отставку // ВИЖ. 1996. №6. С.82-87.
179. Самошин С. И. Коломенские солдаты суворовских и кутузовских // ВИЖ. 2007. №8. С.68-70.
180. Фролова М. М. Капитан «полковничьего ранга» А. Н. Чертков // ВИЖ. 2011. №6. С.76-79.

f. 武官に対する給養（兵器含む）のシステムと実態

181. Бенда В. Н. Материальное обеспечение чинов артиллерии в России в 1700-1750 гг. // ВИЖ. 2009. №11. С.65-67.
182. Бобков В. А. Российские арсеналы в XVIII – начале XIX века // ВИЖ. 2010. №8. С.35-41.

- Slavonic Papers*, Vol.29 No.1, 1987, PP.24-44.
197. Kotilaine, J. T., In Defense of the Realm: Russian Arms Trade and Production in the Seventeenth and Early Eighteenth Century, in Lohr & Poe (eds.), *The Military and Society in Russia*, PP.67-95.
- f'. 褒賞制度
198. Владимиров А. Орден святого Александра Невского // Военный вестник. 1994. №4. С.86-88.
199. Евланов В. А. Золотое оружие – особый вид боевой награды // ВИЖ. 1988. №9. С.83-85.
200. Лебединцев А.З. Об орденах дореволюционной России // ВИЖ. 1988. №1. С.83-85.
201. Образцов И. В. За службу и храбрость // ВИЖ. 1994. №9. С.59-66.
202. Хазин А. Л. Высшая награда Отечества. К вопросу о создании статуса ордена Святого апостола Андрея Первозванного // ВИЖ. 2008. №12. С.53-55.
- g. 軍事拠点の整備
203. Аблаев Ю. М. Исторический аспект формирования государственной границы России с Эстонией в правобережные реки Нарвы // ВИЖ. 2011. №5. С.43-48.
204. Аваков П. А. Строительство военных укреплений на южных рубежах России в 1702-1711 гг. // ВИЖ. 2011. №2. С.61-64.
205. Веремейчук А. Е. «Нужно иметь в особом внимании город Несвиж, яко место укрепленное...» Несвижский замок князей Радзивиллов в системе обороны Российской империи // ВИЖ. 2007. №11. С.43-46.
206. Кузьмин С. Л. Обнаружено место стоянки воинов Петра // ВИЖ. 2002. №10. С.70-71.
207. Лупанова Е. М. Астраханский порт в конце XVIII – начале XIX столетия // ВИЖ. 2011. №3. С.34-37.
208. Таймасов С. У. Основание Оренбургской губернии в 1744 г. // Вопросы истории. 2009. №12. С.141-144.
209. Barrett, T. M., Lines of Uncertainty: The Frontiers of the Northern Caucasus, in Burbank, J., Ransel, D. L. (eds.), *Imperial Russia: New Histories for the Empire*, Bloomington & Indianapolis 1998, PP.148-173.
210. Hartley, J., Gizhiga: Military Presence and Social Encounters in Russia's Wild East, *The Slavonic and East European Review*, Vol.86 No.4, 2008, PP.665-684.
- h. 武官の心性・意識
211. Гордин Я. А. Дуэли и дуэлисты. СПб., 1996.
212. Демидов А. В. «Офицеры суть солдатам, яко отцы детям, того ради надлежит их достойным образом отечески содержать». Формирование воинского этикета как отражение общественных отношений в России XVIII века // ВИЖ. 2003. №11. С.58-62.
213. Толстова Л. Н. «Только бы жила Россия в блаженстве и славе...». Этические идеи Петра Великого // ВИЖ. 2006. №7. С.8-11.
214. Ryan, W. F., Magic and the Military in Russia, in Klein, J., Dixon, S., Fraanje, M. (eds.), *Reflections on Russia in the Eighteenth Century*, Köln 2001, PP.84-95.
- i. 武官の徴用・養成のシステム
215. Авилов А. Т. По ступеням офицерской карьеры. Кадровым органам Российских Вооруженных Сил – более четырех с половиной веков // ВИЖ. 1997. №6. С.18-27.
216. Аурова Н. Н. Идеи Просвещения в 1-м Кадетском корпусе (конца XVII – первая четверть XIX в.) // Вестник Московского университета. Серия 8. История. 1996. №1. С.34-42.
217. Аурова Н. Н. Система военного образования в России: Кадетский корпус во второй половине XVIII – первой половине XIX века. М., 2003.
218. Бенда В. Н. Первые российские артиллерийские и инженерные школы в конце XVII – первой четверти XVIII века // ВИЖ. 2009. №9. С.23-28.
219. Гребеникова Г. А. «Стараться...к верной службе и пользе государственной». Из истории Морского шляхетного кадетского корпуса. Середина XVIII века // ВИЖ. 2008. №4. С.45-48.
220. Данилов В. А. «Учение сделать простым, живым, заманчивым, а не запутанным и не схоластическим». Гуманитарное образование в военно-учебных заведениях России в XVIII – XIX веках // ВИЖ.

2003. №2. С.30-34.
 221. Дема Е. Г. Искоренить казнокрадство пытался еще Петр I // ВИЖ. 2000. №2. С.81-87.
 222. Демидов А. В. «Которые, стоя перед неприятелем...знамя свое или штандарт до последней капли крови оборонять не будут...имеют...повешены быть». Особенности Артикула воинского Петра Великого // ВИЖ. 2003. №10. С.29-32.
 223. Дуров И. Г. Петр I: «Впредь матрозов из рекрут никогда не комплектовать...» // ВИЖ. 2003. №9. С.42-47.
 224. Змеев В. А. «Обучать...к воинскому искусству потребным наукам» // ВИЖ. 2001. №11. С.49-53.
 225. Корякко В. И. От навигацкой школы – к военно-морской академии // ВИЖ. 2001. №7. С.63-65.
 226. Кузинец И. М. Петр I: «Ко учению усмотря избирать добровольно желающих, иных же паче и вопринуждением» // ВИЖ. 2002. №3. С.36-42.
 227. Куроедов В. И., Овечкин А. Н. Военно-морская элита России: проблемы и решения // ВИЖ. 2002. №7. С.2-66.
 228. Лютов С. Н. Военное книгоиздание в России при Петре I // ВИЖ. 2007. №5. С.63-66.
 229. Лютов С. Н. Русская военная книга во второй половине XVIII века // ВИЖ. 2007. №10. С.63-66.
 230. Мурай В. В. Павел I: штрихи к портрету. Гатчина и военные реформы Павла I // ВИЖ. 2010. №4. С.41-45.
 231. Панин И. Г. Уроки трехсотлетней истории российской военной школы // ВИЖ. 1998. №6. С.2-8.
 232. Попов А. В. Офицерская честь в русской армии XVIII – начала XX века // ВИЖ. 2008. №4. С.77-79.
 233. Строевые уставы инструкции и наставления русской армии XVIII века. Сборник материалов в 2-х томах. М., 2010. (史料集)
 234. Харламов В. И. Военное образование в России в XVIII веке // ВИЖ. 1997. №4. С.50-59.
 235. Харламов В. И. Чему и как учили русских офицеров в XVIII веке // ВИЖ. 1999. №3. С.77-85.
 236. Щербинин П. П. Жизнь русской солдатки в XVIII – XIX веках // Отечественная история. 2005. №1. С.79-92.
 237. Ярыгин В. С. Люди и корабли. С чем вступили кадровые органы ВМФ в новое тысячелетие? // ВИЖ. 2002. №4. С.29-34.
 238. Hartley, J., The Russian Recruit, in Klein et al. (eds.), *Reflections on Russia in the Eighteenth Century*, PP.32-42.
 239. Janco, A.P., Training in the Amusements of Mars: Peter the Great, War Games and the Science of War, 1673-1699, *Russian History*, Vol.30 Nos.1-2, 2003, PP.35-112.
 240. Kimerling, E., Soldiers'Children, 1719-1856: A Study of Social Engineering in Imperial Russia, *Forschungen zur osteuropäischen Geschichte*, Bd.30, 1982, S.61-136.
- j. 軍内の非戦闘員の活動
241. Будко А. А., Селиванов Е. Ф. Последний российский архиатор // ВИЖ. 2002. №7. С.68-69.
 242. Будко А. А. Петр I: «При тех больных солдатах быть всегда...». Медицина Санкт-Петербурга – армии и флоту // ВИЖ. 2003. №6. С.64-69.
 243. Будко А. А., Селиванов Е. Ф. Реформатор российской медицины века Просвещения. К 250-летию назначения на пост архиатора и главного директора Медицинской канцелярии П. З. Кондоиди // ВИЖ. 2003. №10. С.60-62.
 244. Будко А. А., Фролов А. А., Журавлев Д. А. «Таковое сострадание и милость его к ним были наилучшим для них лекарством». Опыт Полтавского сражения был использован Петром для реорганизации военно-медицинской службы // ВИЖ. 2009. №7. С.18-21.
 245. Иванова Ю. Н. Женщина в истории российской армии // ВИЖ. 1992. №3. С.86-88.
 246. Ключев В. М., Ипатов П. В., Денисов С. Л. «Великий Петр решил...создать свою русскую больницу» // ВИЖ. 2006. №5. С.51-56.
 247. Костюк А. В. Военно-морские госпитали в XVIII веке // ВИЖ. 2011. №12. С.58-62.
 248. Проскурякова М. Е. Военные госпитали выбогской провинции в период русско-шведской войны 1741-1743 годов // Российская история. 2009. №5. С.150-154.

249. *Сосин В. В., Будко А. А.* Петр I: «Здесь изнеможенный воин найдет себе помощь и успокоение». Система медицинского обеспечения боевых действий создавалась в России веками // ВИЖ. 2004. №1. С.54-59.
250. *Чимаров С. Ю.* Во главе военно-духовного ведомства России. П. Я. Озерецковский – первый обер-священник русской армии и флота // ВИЖ. 1998. №1. С.76-82.

III. その他

к. 戦略や外交との関係

251. *Артамонов В. А.* Россия и Речь Посполитая после Полтавской победы (1709-1714). М., 1990.
252. *Белова Е. В.* Русско-турецкие войны и миграционная политика России в первой половине XVIII в. // Вопросы истории. 2008. №5. С.141-145.
253. *Бруз В. В.* Россия и общеевропейская безопасность в XVIII – XIX вв. // ВИЖ. 2004. №12. С.52-58.
254. *Гребенщикова Г. А.* Вооруженный нейтралитет Екатерины II: Причины и следствия // ВИЖ. 2007. №4. С.26-29.
255. *Дейников Р. Т.* Россия, Турция и Крымское ханство в 40-60-х годах XVIII века // Российская история. 2009. №6. С.147-157.
256. *Ибрагимова И. И.* Дагестан и отношения России с Турцией и Ираном во второй половине 70-х гг. XVIII в. // Вопросы истории. 2008. №11. С.152-154.
257. История военной стратегии России. М., 2000.
258. *Орешкова С. Ф.* Османская империя и Россия в свете их геополитического разграничения // Вопросы истории. 2005. №3. С.34-46.
259. *Писаренко К. А.* Абоский мир 1743 года // Вопросы истории. 2010. №3. С.106-113.
260. *Феофилактова Т. М.* Крымский и грузинский вопросы в русско-турецких отношениях (1768-1783) // Вопросы отечественной истории. Краснодар, 1995. С.98-105.
261. *Шеремет В. И.* Сафьяновый портфель М. И. Кутузова // ВИЖ. 1995. №5. С.75-78.
262. *Шеремет В. И., Зеленина Л. В.* Россия и Малита: триста лет дружбы // ВИЖ. 1998. №6. С.72-80.
263. *Menning, B. W.*, The Army and Frontier in Russia, in Reddel (ed.), *Transformation in Russian and Soviet Military History*, PP.25-38.
(他に J. P. LeDonne の地方総督研究や戦略研究、W. C. Fuller, Jr. の戦略研究なども重要だが、煩雑さを避けるために本稿では割愛した)
1. 一般社会に対する軍隊文化の影響
264. *Болтунова Е.М.* Тема войны в декоре российских императорских дворцов XVIII – первой половины XIX века // ВИЖ. 2010. №12. С.44-49.
265. *Гидиринский В. И.* Русская идея и армия (философско-исторического анализа). М., 1997.
266. *Ефимов С. В.* «На вечную память поставить...»: Петр Великий и сохранение военно-исторических реликвий Российского государства // ВИЖ. 2011. №1. С.58-63.
267. *Иванов Е. С.* Формирование понятия воинской чести в российской регулярной армии в XVIII веке // ВИЖ. 2007. №11. С.21-26.
268. *Ивашко М. И.* Военно-церковные отношения XVIII – начала XX века // ВИЖ. 2005. №6. С.66-70.
269. *Котков В. М., Коткова Ю. В.* Военные храмы столицы Российской Империи // ВИЖ. 2003. №6. С.58-63.
270. *Крылов В. М.* «Для памяти на вечную славу». Военно-историческому музею артиллерии, инженерных войск и войск связи – почти триста лет // ВИЖ. 1998. №2. С.83-87.
271. *Кузнецов А. М.* Военные музеи в императорской России // ВИЖ. 2007. №2. С.56-61.
272. *Мезин С. А.* «Полтавская баталия» в сочинениях Феофана Прокоповича // Историографический сборник. Вып.14. Саратов, 1989. С.153-161.
273. *Орлов А. А.* Наполеон требовал приравнять карикатуристов к убийцам. Русские и французы в английской карикатуре конца XVIII – начала XIX века // ВИЖ. 1999. №6. С.73-81.
274. *Шныпко В. С.* Отечественная историография о роли военного знамени в русской армии // ВИЖ. 2010. №3. С.38-42.

275. Breyfogel, N. B., Swords into Plowshares: Opposition to Military Service Among Sectarians, 1770s to 1874, in Lohr & Poe (eds.), *The Military and Society in Russia*, PP.441-467.
276. Tayler, B. D., *Politics and the Russian Army: Civil-Military Relations, 1689-2000*, Cambridge 2003.
277. Wirschafter, E. K., Military Service and Social Hierarchy: The View from Eighteenth-Century Russian Theater, in Lohr & Poe (eds.), *The Military and Society in Russia*, PP.221-240.

1'. 武官による行政・司法への関与

278. Бабич М. В. К истории государственных учреждений XVIII в.: “майорские канцелярии” // Отечественные архивы. 2000. №1. С.21-31.
279. Калашиников И. А. Кто и как судил преступников при Петре I. Деятельность майорских розыскных канцелярий в начале XVIII века // ВИЖ. 1999. №1. С.76-79.

m. その他

280. Беловинский Л. В. Военный историк Д. Ф. Масловский // ВИЖ. 1987. №3. С.85-88.
281. Богданов В. В. История любви первой русской полярницы // ВИЖ. 2001. №10. С.67-75.
282. Лосик А. В., Щедра А. Н. Военно-технические вопросы в «Истории Российской» В. Н. Татищева // ВИЖ. 2011. №7. С.66-71.
283. Шебалдина Г. В. Шведские военнопленные в Сибири в первой четверти XVIII века. М., 2005.

参考文献

- Анисимов Е. В. (1982), Податная реформа Петра I. Введение подушной подати в России 1719-1728 гг. Л.
- Бантыш-Каменский Д. (1840), Биографии российских генералиссимусов и генерал-фельдмаршалов. Чч.1-4. СПб.
- Бескровный Л. Г. (1958), Русская армия и флот в XVIII веке (Очерк). М.
- Brewer, J. (1989), *The Sinews of Power: War, money, and the English State, 1688-1783*, London (大久保桂子訳『財政＝軍事国家の衝撃——戦争・カネ・イギリス国家

- 1688-1783——』名古屋大学出版会 2003年)。
- R. M. デッカー、L. C. ファン・ドゥ・ボル (2007)、大木昌訳『兵士になった女性たち——近世ヨーロッパにおける異装束の伝統——』(法政大学出版局)。
- Elliott, J. H. (1992), A Europe of Composite Monarchies, *Past & Present*, No.137, PP.48-71.
- Фаизова И. В. (1999), «Манифест о вольности» и служба дворянства в XVIII столетии. М.
- Gustafsson, H. (1998), The Conglomerate State: A Perspective on State Formation in Early Modern Europe, *Scandinavian Journal of History*, Vol.23 No.3-4, PP. 189-213.
- Hellie, R. (1974), The Petrine Army: Continuity, Change, and Impact, *Canadian-American Slavic Studies*, Vol.8 No.2, PP.237-253.
- Янчук Н. А. (1909), К 200-летию Полтавской битвы // Русский архив. Кн.2. №7. С.466-474.
- Юнаков Н. Л. (1909), Полтава. (27 июня 1709 года) // Русская старина. Т.139. Июль. С.3-20.
- Koenigsberger, K. G. (1989), Composite States, Representative Institutions and the American Revolution, *Historical Research*, Vol.62 No.148, PP.135-153.
- Lohr, E., Poe, M. (eds) (2002), *The Military and Society in Russia, 1450-1917*, Leiden.
- Лотман Ю. М. (1994), Беседы о русской культуре: Быт и традиции русского дворянства (XVIII – начало XIX века). СПб. (桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳『ロシア貴族』筑摩書房 1997年)。
- 三宅正樹・石津朋之・新谷卓・中島浩貴編著 (2011)、『ドイツ史と戦争——「軍事史」と「戦争史」——』(彩流社)。
- 二宮宏之 (1979)、「フランス絶対王政の統治構造」(吉岡昭彦・成瀬治編『近代国家形成の諸問題』木鐸社) 188-233頁。
- 大久保桂子 (1997a)、「ヨーロッパ『軍事革命』論の射程」(『思想』No.881) 151-171頁。
- 大久保桂子 (1997b)、「軍事史の過去と現在」(『国学院雑誌』第98巻第10号) 30-44頁。
- Полное (1830) собрание законов Российской империи. Собр. I-е. Т.43. Ч.1. СПб.
- Полтава (1959). К 250-летию Полтавского сражения. Сборник статей. М.
- Рабинович М. Д. (1969), Формирование регулярной русской армии накануне Северной войны // Вопросы военной истории России. XVIII и первая половина XIX веков. М.
- 阪口修平 (2001)、「近世ドイツ軍事史研究の現況」(『史学雑誌』第110編第6号) 84-103頁。
- 阪口修平・丸島宏太編著 (2009)、『軍隊』(ミネルヴァ書房)。
- 阪口修平 (2010)、「軍事史研究の新しい地平——「歴史学」の一分野としての軍事史」をめぐって」(阪口編著『歴史と

- 軍隊——軍事史の新しい地平——』創元社)。
- 鈴木直志 (2003)、『ヨーロッパの傭兵』(山川出版社)。
- 鈴木直志 (2005)、「タブーからの脱却——戦後の西洋史学における近世軍事史研究——」(『年報戦略研究』第3号) 191-214 頁。
- 田中良英 (2012)、「18世紀末までの専制——君主と統治階級——」(ロシア史研究会編『ロシア史研究案内』彩流社) 29-42 頁。
- Вопросы (1969) военной истории России. XVIII и первая половина XIX веков. М.
- Wortman, R. S. (1995), *Scenarios of Power: Myth and Ceremony in Russian Monarchy, Vol. I, From Peter the Great to the Death of Nicholas I*, Princeton.
- Законодательство (1997) Петра I. М.
- Звягинцев А. Г., Орлов Ю. Т. (1994), Око государево. Российские прокуроры. XVIII век. М.

(平成24年9月28日受理)